

## 神様の約束を信じない 人間の愚かさ

民数記14章26～38節  
2021年4月18日  
松田 基子 師

私達は4月4日に、イエス・キリストが十字架の死から復活された、イースターを祝いました。

使徒パウロはIコリント15章14節で、

「キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」

と言っています。イエス・キリストの復活こそ、ヨハネ3章16節の

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

と約束された、神様の約束の保証なのです。

イエス様は、人類を永遠の滅びから救うために、神の子の位を捨てて、人の世に生まれ、神様の愛の御心を教え、その身を以て、神様の愛を表し、遂には全人類の罪を一身に負って、神の子の価を差し出し、身代わりの十字架に架かって、人類の罪を贖われました。神様は御子イエス様の十字架による贖いで、人類の罪を赦し、救いの道を開き、イエス・キリストを信じる者に、永遠の命を与える保証に、イエス様を十字架の死から、3日目に復活させられました。

ところで、皆さんは神様の、この約束を心から信じて、この約束を握って御国を目指して人生を旅しておられるでしょうか。今朝、神様はわたし達に、その事を問うて、出エジプトをして、約束の地カナンを目指して、荒れ野を旅するイスラエルの民を示して下さいます。人生は旅です。旅には目的地があります。しかし、人生の旅は、着くべき場所に辿り着かない旅路が何と多いことでしょうか。

エジプトで奴隷であったイスラエルの民は、その苦しい苦役の中から、神様に向かって助けを求めました。神様は先祖アブラハムとの契約に従って、彼らに指導者モーセを与えて、世界の頂点にいた、エジプトのファラオの下から、10の奇跡を起こして、エジプトを脱出させ、約束の地、

カナンを目指して、旅立たせられました。

しかし、その道は、荒れ野や砂漠を通って行かなければならない、困難な旅路でした。人々は飢えと渇き、生活環境の劣悪さに、呟き続けました。それでも神様は、彼らを見捨てることなく、朝毎に、マナを食物として与え、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって導き、助け続けられました。

さて、民数記1章1節を見ますと、

「イスラエルの人々がエジプトの国を出た、翌年の第2の月の1日、シナイの荒れ野にいたとき、主は臨在の幕屋で、モーセに仰せになった。

『イスラエルの人々の共同体全体の人口調査をなさい。』

と命じられています。そこで、モーセとアロンは共同体全体を招集し、兵役に就く事の出来る20歳以上の男子を、氏族毎に、家系に従って1人1人点呼し、戸籍登録をさせました。シナイ山麓で、律法を受けて、旅路を進む陣容を整えたイスラエルは、巻末の地図をみますと、シナイ半島の東側アカバ湾側を北上して、約束の地、カナンの南の入口カデシュ・バルネアまでやってきました。

神様はモーセに、13章2節で、

「人を遣わして、わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナンの土地を偵察させなさい。」

と命じられました。12部族から、1人ずつ12人が、40日に渡って現地調査に送り出されました。40日の後、彼らは偵察から帰って来て報告をしました。13章27節に、

「彼らはモーセに説明して言った。

『わたしたちは、あなたが遣わされた地方に行ってきました。そこは乳と蜜の流れる所でした。これがその果物です。しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく、しかもアナク人の子孫さえ見かけました。ネゲブ地方にはアマレク人、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人、海岸地方およびヨルダン沿岸地方にはカナン人が住んでいます。』

と言っています。

イスラエルのカナン定住は、紀元前1250年頃とされています。その頃のカナン地方は、地中海に向かって開けていることから、既に文化も、技術も進んだ都市国家が築かれていました。偵察隊は、田舎から大都会へ出て来た人が、生活の違いに圧倒されたと同じショックを受けたのです。12人の内、ショックを受けた10人が、13章32節で、

「我々が偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を食い尽くすような土地だ。我々が見た民は皆、巨人だった。そこで我々が見たのは、ネフィリムなのだ。」

ネフィリムと言うのは、神話上の巨人のことで、天から落ちた者と、人間の間に生まれた者との子孫だと考えられていました。

「アナク人はネフィリムの出なのだ。我々は、自分がイナゴのように小さく見えたし、彼らの目にもそう見えたにちがいない。」

と言っています。

マイナスの報告と言うのは、強い感染力をもっています。14章1節を見ますと、

「共同体全体は声を上げて叫び、民は夜通し泣き言を言った。イスラエルの人々は一斉に、モーセとアロンに対して不平を言い、共同体全体で彼らに言った。

『エジプトの国で死ぬか、この荒れ野で死ぬ方が、よほどましだった。どうして、主は我々をこの土地に連れて来て、剣で殺そうとされるのか。妻子は奪われてしまうだろう。それくらいなら、エジプトに引き返した方がましだ。』

そして、互いに言い合った。

『さあ、一人の頭を立てて、エジプトへ帰ろう。』

と記されています。

これが罪深い自己中心、自分の考えを正しいとして、神様の約束を疑い、神様に従わず、自分の道を進む人間の姿です。その間違いに対して、ヌンの子ヨシュアとエフネの子カレブは、悲しみを訴える行為である、衣を引き裂いて、イスラエルの人達の共同体全体に訴えました。14章7節に、

「我々が偵察してきた土地は、とてもすばらし

い土地だった。もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあのに土地に、導き入れ、あの乳と蜜の流れる土地を与えてくださるであらう。ただ、主に背いてはならない。彼らは我々の餌食に過ぎない。彼らを守る者は離れ去り、(つまり、偶像は力をもたず。)主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない。」

と二人は命がけで、同胞を説得しました。

けれども民衆は、聴く耳を持たないで、何と、二人を、

「石で打ち殺せ」

と言ったのです。民衆が暴走しそうになった時、10節に、

「主の栄光はそのとき、臨在の幕屋でイスラエルの人々全てに現れた。」

とあります。神様は天から、彼らの愚行を見られ、モーセと語るために、臨在の幕屋を雲で覆われたのでした。

民衆はやっと、神様を意識しました。神様はすべてを見ておられ、全て聞いておられた事に、気付いたのです。神様は何と言われたのでしょうか。14章11節に、

「主はモーセに言われた。

『この民は、いつまでわたしを侮るのか。彼らの間でおこなった全てのしるしを無視し、いつまでわたしを信じないのか。わたしは、疫病で彼らを撃ち、彼らを捨て、あなたを彼らより強大な国民にしよう。』

とあります。

神様はイスラエルの身勝手さを、

『ご自身を侮っている』

と言っておられます。侮るとは、バカにする。軽く見る。侮辱する。神様の聖名を汚すことです。イスラエルの側としては、

『そんなつもりはありません』

と言うでしょう。それでは考えてみましょう。彼らは約束の地の入口に来るまで、神様の助けと導きを、語り尽くせないほど体験してきました。それは神様の奇跡の連続でした。それにもかかわらず、彼らには神様に対する、感謝と畏れがありませんでした。何時も、あれが足りない、

これが足りない。ああしてくれない。こうしてくれない。不平不満ばかりです。悔ると言うのは、軽く見ると言うことです。

人間は何と傲慢なのでしょう。神様を使用人と間違えています。神様を自分の造り主として崇め、恵みの数々に、自分はそれを受けるに値しない者として、生かされている、感謝と喜びを表してこそ、造られた者としての、あるべき姿ではないのでしょうか。神様は、

『ご自身のそのような恵みを受け、徴を見ながら、いつまでわたしを信じないのか。』  
と言っておられます。神様に対する感謝と、喜びが何故湧いて来ないのでしょうか。問題はそこです。神様に対する信頼がないので、神様に全てを賭けて、従うという信仰がないのです。そこが根本です。イスラエルはそのために、神様が導いて下さった全てを否定して、エジプトに帰る事を求めました。神様がお怒りになるのは当然のことです。そこで、神様が降された決断は12節を、岩波訳によりますと、  
「わたしは彼らを伝染病で撃ち、彼らと絶縁する。つまり、嗣業として継ぐことはない。そして、わたしは、あなたを彼らよりも偉大な、強い国民としよう。」  
と神様はモーセに言われました。

モーセの指導者としての素晴らしさは、ここでも、神様の前に遜って(へりくだって)、民を執り成しました。

『イスラエルの神様が、如何に強大な神であるか、出エジプトから荒れ野の旅を、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって、導いて来られたこと、それはこの地方の国々にも聞こえています。』  
『それを約束の地まで、導かれないなら、神様あなた様の御名に傷がつきます。あなたは忍耐強く、慈しみに満ち、罪と叛き(そむき)を許す方です。どうかあなたの大きな愛、慈しみの故に、またエジプトから、ここまでこの民を赦して来られたように、この民の罪を赦して下さい。』  
と懇願しました。

神様はモーセの執り成しを受け入れて、

20節で、

「あなたの言葉のゆえに、わたしは赦そう。」とお答えになりました。神様の愛と憐れみが無かったならば、イスラエルばかりでなく、同じ心を持つ人間は全て、滅ぼし去られて当然でありました。しかし、高慢な人間は、神様の愛と真実を、本当に分かろうとはしません。神様が赦してくださるのは当たり前だと思っているのです。それこそ神様を侮っている心です。

そこで神様は、26節で、

「主はモーセとアロンに仰せになった。  
『この悪い共同体は、いつまで、わたしに対して不平を言うのか。わたしは、イスラエルの人々がわたしに対して言う不平を十分に聞いた。彼らに言うがよい、主は言われる、わたしは生きている。』」  
「わたしは生きている」と言う、この言葉は、神様が発せられた誓いや言葉は、必ず実現する事を強調する言葉です。

『わたしは、お前たちが言っていることを耳にしたが、その通りお前たちに対して必ず行おう。お前たちは死体となってこの荒れ野に倒れるであろう。わたしに対して不平を言った者、つまり、戸籍に登録された20歳以上の者はだれ一人、わたしが手を挙げて誓い、あなたたちを住まわせると言った土地に入ることは無い。ただし、エフネの子カレブとヌンの子ヨシュアは別だ。』

『お前たちは、子供たちが奪われると言ったが、わたしは彼らを導き入れ、彼らは、お前たちの拒んだ土地を知るようになる。しかし、お前たちは死体となってこの荒れ野で倒れる。』

と言っておられます。

人間的な考えに立って、神様に信頼せず、まだ起こってもいない、剣に倒れてしまうのではないかという不安から、

「エジプトの国で死ぬか、この荒れ野で死ぬ方がよほどました。」  
と言ったのは、他ならぬイスラエルの一人ひとりでした。

神様の言葉は、

「わたしは生きている。」  
と宣言される程、確実なものです。言葉は真実でなければなりません。言葉には責任が伴います。神様はそのことをイスラエルに教えられました。神様と人との信頼関係、信仰は、言葉によって築かれて行きます。イエス・キリストが神の言葉として、人の子となって下さった意味が、そこにあります。イスラエルの民は、自分の語った言葉を、自分で責任を負わなければなりませんでした。しかし、それで神様はイスラエルをお見捨てになった訳ではありません。

33節に、

『お前たちの子供は、荒れ野で40年の間羊飼いととなり、お前たちの最後の一人が荒れ野で死体となるまで、お前たちの背信の罪を負う。あの土地を偵察した40日という日数に応じて、一日を一年とする40年間、お前たちの罪を負わねばならない。お前たちは、わたしに抵抗するとどうなるかを知るであろう。主であるわたしは断言する。わたしに逆らって集まったこの悪い共同体全体に対して、わたしはこのことを行う。彼らはこの荒れ野で死に絶える。』

と宣言されました。

神様はご自身について、  
出エジプト34章6節から、

「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」

と宣言されました。祝福は千代まで、罰は3、4代までと記されています。しかし、ここで、

「次世代が、父祖の罪を負わなければならぬなんて神様ひどいではありませんか。」

と言う声が聞こえてきますが、本来ならば父祖の叛きの罪は、共同体全体が滅ぼされるに価するものでありました。神様に対する罪はそれ程重いのです。しかし、憐れみ深い神様は、次世代を生かし、次世代を神様御自身の民に育てられるのです。そのために荒れ野で40年の訓練が必要なのです。神様の御言葉以外に、頼るものがない環境に置かれて、神様の御言葉のみ

に頼る民に育てられるのです。そして40年後、彼らを約束の地、カナンに導き、定住を実現させて下さるのです。

約束の地に入れたのは、民数記26章で行われた第2の人口調査、第1回目に20歳以下で、その名がなかった、次世代の者達です。約束の地に入ることが出来たのは、神様に信頼し、御言葉を信じ、神様の約束に賭けて従った人々でした。この信仰の法則は、今日も変わりません。ガラテヤ6章8節には、

「自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、  
霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取りま  
す」

と約束されています。わたし達が天の御国に辿り着けるかどうか、それは、イエス・キリストの十字架と復活を信じ、イエス様に信頼し、約束に賭けて行く信仰に掛かっています。人生の旅路に襲ってくる様々な誘惑、困難は、信仰を奪おうとします。しかし、その試練の直中で、主は共にいて下さり、最善を成して下さることを信じましょう。そして、主に信頼し、忍耐して呟かず、疑わず、天の御国を目指して、イエス・キリスト一途に歩んで行こうではありませんか。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様。

わたし達のご自身から命を与えられ、全てを守られ、生かされているにも拘らず、感謝をすることなく、呟いてばかりいます。この深い罪をお赦し下さい。

イエス様は、その罪の全てを負って十字架に架かり、罪を贖い、復活して永遠の命に至る道を開いて下さいました。

そして、弱いわたし達の為に、今も神様の右に座して、わたし達の為に執り成し続けていて下さることを、心から感謝致します。

わたし達は、人生の旅路を神様に信頼し、イエス様を信じ、御国を目指して参ります。弱いわたし達を、聖霊が助けて下さり、御国に辿り着く者とならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの  
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。